5　ジンバブエ

新たなる伝統をめざして

平野克己

"エスニック"の流行？

先ずは写真を一枚。ジンバブエのデザイナー、ソニー・マッコリスキの作品で、国産の手織綿ジャバ（java）を使用した、同国でいま流行中のエスニック・テイストである。いかにもアフリカ的なこのエスニシティーは、しかしながら、この国のものではない。

ところで、西アフリカギニア湾岸の国々を訪ねると、華やかな色彩に身を包んだ女性たちの姿が、殺風景な街並に咲いた色とりどりの花のごとくである。また、スーダンやチャドでは真白いガラビーヤの人並が、夕暮れ時にはいかにも涼しげであった。異国情緒たっぷりの服飾文化が与えてくれる、その国ならではの視覚の楽しみ。だが残念ながら、これが南部アフリカには希薄なのだ。ここは、ヨーロッパの近代衣装が支配する世界である。

ヨーロッパと出会う以前

現在ジンバブエ総人口の七割強を占めるショナ語族は、その昔、農耕と牧畜に生活基盤を置きながらも交易によっておおいに栄えた。金を豊富に産出したからである。その精華が南部アフリカ最大の遺跡グレート・ジンバブエであるが、そのグレート・ジンバブエから紡績器具が発掘された。つまり、遅くとも十三世紀にはこの地で、自生綿花を使った綿布生産が行われていたという証拠である。当時の世界商品であったインド産綿布も輸入されていた。

もうひとつ、忘れてはならない繊維製品がある。現在でも壁掛け等の装飾品として作られ続けている樹皮繊維布である。特殊な樹木から樹皮を剝して、表面のコルク質を除去し、柔らかい繊維部分のみを取り出す。これを毛布大に編んだものをグザ（gudza）という。グザは食料保存用の袋や雑穀ビールの漉し器にも使われていたらしいが、これを土や植物でもって染色し、女性の衣類として用いた。

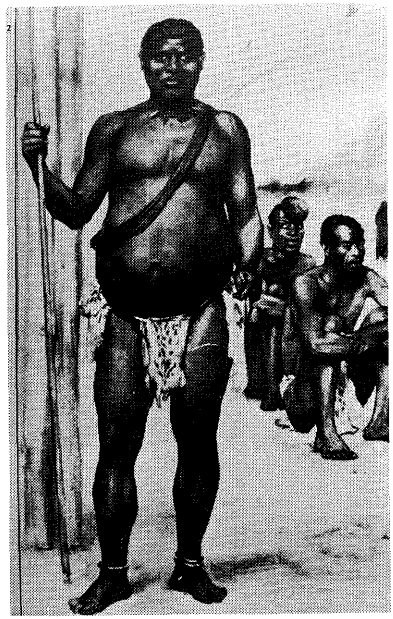
ショナ人が樹皮布を着用していたことは、十六世紀にこの地を訪れたポルトガル人の書簡にも記されている。余談ながら、この書簡の宛先は、当時ゴアのイエズス会で本国報告文書を担当し

ていたルイス・フロイスである。これを受け取った数年後にフロイスは日本に渡り、やがて信長と会見することになる

悲劇の王家　であるからして、これがショナの〝伝統衣装〟ということになる。グザの短い腰巻きに革製のベルトを締め、真鍮のバングルにンドロ（ndoro）と呼ばれる金属盤が装身具である。つまりはほとんど裸であった。これで寒ければ、左下の写真のようにして綿布やグザをはおっていたのである。うっすらと見える幾何学模様はグザの特徴である。

グレート・ジンバブエはやがていくつかの王国に分裂するが、その後も栄えたショナの諸王国は、十九世紀になって侵入してきたヌグニ人によって次々に滅ぼされてしまう。ヌグニのなかで

上：ショナの女性（1897年撮影，National Archives 所蔵）
下：グレート・ジンバブエの女性



ンデベレ王国の元首ロベングラ

も最も強力だったのは首長ムジリカジが率いる集団で、彼らはここにンデベレ王国を建設し、ショナ人はその支配下に組み込まれた。現在、ンデベレ人はジンバブエ総人口の二割弱を占めている。

ムジリカジの息子で、ンデベレ王国二代目の王であるロベングラの肖像画も見ていただこう。彼は、一八七〇年に王位を継承した後、ヨーロッパ式装束を捨ててこの格好で過ごしたという。つまり裸である。彼は英国に戦いを挑んで敗北、生き残った部下とともに王国の首都ブラワヨから逃れ追走する英軍と戦ったが、一八九四年に死んだという。彼の埋葬地は分っていない。

ついでに彼の息子たちも紹介しておこう。南アフリカのケープタウンの学校に通う三兄弟である。この写真は父の死の直後に撮影されている。立派な洋装だが、表情は厳しい。アフリカ人勢力の弾圧に成功して、この地にローデシアを創設したばかりの英国南アフリカ会社は、彼らがン

デベレの王として迎えられ、再び騒乱が起こるのを警戒した。次男ムペゼニはこの四年後に、長男ンジュベは十五年後に、異国の地で死んでいる。

そして今　ヨーロッパ人が、水源に恵まれマラリアの心配がない高地へと大量入植していくに従って、アフリカ人労働者もまた、寒冷な気候のもとで生活しなければならなくなった。首都ハラレは、真冬なら朝夕零度を下回る。裸で過ごせる気候ではない。二十世紀に入るや否や、アフリカ人の間にヨーロッパの近代衣装が急速に普及する。伝統衣装は、ダンシング・チームや観光地での客寄せ以外は、村祭りですら見られなくなった。

となれば、手ごろな価格で衣料を提供する産業が必要になるわけだが、ジンバブエには安定した綿花生産と、輸出余力を持つ繊維産業およびアパレル産業が存在する。最近は日本でもジンバブエ綿の製品を見かけるようになった。

ジンバブエ人男性の事務服は、黒人も白人も判で押したようにネクタイにジャケット。サファリスーツやカウンダ・スーツを着てい

ロベングラの3人の息子たち（1895年撮影，National Archives 所蔵）

ジンバブエ大学の女子学生

るのはまず間違いなく外国人である。冬になればネクタイをした上からVネックのセーターを着るのが一般的だ。

写真はジンバブエ大学で写したもの。大学生ともなればご覧の通りいかにも身綺麗だが、それでも白黒地を好み派手な原色は着用しない傾向がある。

ファッション・フロンティア

そこで、ジェニファー・チバに話を聞いた。彼女はかつてのトップ・モデル、現在はデザイナーとして地歩を固めつつある。ちなみに、ご主人はジンバブエ在住空手家の千葉晴信氏である。

彼女によれば、「国産衣料の中心は綿製品で、国産綿布の価格も安定している。婦人服では四〇〇Zドル（およそ一万円）内外の製品が最も売れ筋の価格帯」である。ただ、ジンバブエ人の「嗜好は保守的で地味好み。白黒や土色の地に動植物のプリントというのがお決まりの柄だったけど、最近はブッシュマン・プリント（先住民族のサン族が巨石に残した古代絵）が流行ね」。そういえば手織綿布の名称であるジャバも、本来は土色

という意味であって、正確にはジラ・ジャバ（jira-java＝土色の毛布）である。白色の布地に土で染色し、単純な幾何学模様を施した綿布や樹皮布を、数百年にわたって愛用してきた民族の嗜好がいまも息づいている、というわけだろうか。

再び余談だが、韓国等アジア諸国から輸入した黒色直毛の人毛を使ってヘア・スタイルを整えるのが最近はやっているらしい。そういえば、筆者が在住していた一九八〇年代中頃に比べると髪の長い女性が増えたな、とは思っていた。やるものである。この技をウィーヴ・オンという。

さて、ジェニファー自身はケンゾーから多く影響を受けたというが、ジンバブエのファッション状況一般としては「ガーナ、コートジボアール等の西アフリカ諸国、特にナイジェリアの影響がたいへん強い」。こうして、冒頭に紹介したようなエスニック・テイストが登場したわけである。

ジェニファーの最大顧客はブリジット・ムガベ（大統領の実妹）とユダヤ系の某婦人だそうだが、最近は白人がエスニック・スタイルに強い興味を示すようになった。白人・黒人の購入量は半々という。

海外へ

さらに、アメリカ、イタリア、ドイツのバイヤーがジンバブ

ジェニファー

エ・デザインに対して積極的にアプローチしているとのことだ。確かに、前述のソニーをはじめとして数名のデザイナーは海外を主要な活動の場としている。ジェニファー自身は日本市場に進出したいという希望を持っている。「だって私は日本人の好みをよく知っているものね」。千葉さんと遊びまわっていた二十代の頃の自分を思い出した。彼女の日本人感に狂いを生じさせていないことを祈るのみである。

〔参考文献〕

(1) Ellert, H. *The Material Culture of Zimbabwe*, Harare, Longman Zimbabwe, (Pvt) Ltd, 1984.
(2) Seidman, G.; D. Martin; P. Johnson, *Zimbabwe, A New History*, Harare, Zimbabwe Publishing House, 1982.
(3) Douglas, R.G.S., *Zimbabwe Epic*, National Archives, 1984.

（ひらの　かつみ／アジア経済研究所経済開発分析プロジェクト・チーム）